

こだわりのある技能士がCS向上に貢献

7-4 有限会社 近藤工務店

口コミで仕事の質の高さが広がる建築業者

新潟県の近藤工務店は、住宅などの建物の新築工事、増改築、リフォームなどを行う建築業者である。訪問したのは冬に差し掛かる季節で、「仕事が少ないんですよ。」と社長の近藤進氏は話すが、実際には社外の人の手伝いを頼まなければならないほどの仕事が舞い込む。近藤工務店に持ち込まれる案件は、基本的には以前仕事をした顧客からの紹介による。それはつまり、同社の手掛けてきた仕事のクオリティが高く、それが顧客に認められた結果、いわゆる口コミで仕事が広がっているというところに他ならない。



近藤工務店が手掛けた神社

技を深めながら自分の立ち位置を知る

近藤工務店の技能士は「建築大工」という検定を合格している。近藤氏は技能検定を「職人としてキャリアを積んでいくためのプロセスの一過程」と話す。

「手で何かを作る事が重要なのは昔も今も変わりません。検定で問われるような基本的な技術を組み合わせて、応用的で高度な技を編み出せるかが職人の腕の見せ所だと思っています。だから技能検定は職人として生きていくための最初の一步だと思います。」

また、多くの受検者の中の1人として、技能検定に挑戦することそのものも重要だと近藤氏は指摘する。「職人には腕の良し悪しというか、器量があると思うんです。それを技能検定や、競技会に挑戦することで、自分の現在の腕の水準が分かる。その腕で、競技会で勝つことができれば嬉しいし、負ければ悔しいでしょう。でも、自分で納得できる内容で負けたとすれば、それはまだまだ自分の腕を深める余地があるということ。それを身をもって知ることができるというのが、職人として生きていく上ではいい機会になると思います。」

自分の技の深みを追求していきながら、他の職人たちの中での自分の相対的な位置を知る、近藤工務店にとっての技能検定の価値というのは、そのあたりにあるようだ。

プライドを持った職人が業務効率の向上に貢献

仕事の中心に職人の基本的な技術を据える近藤工務店にとって、技能検定は職人がそれを身に付けるために必要不可欠な存在であり、ほとんどの職人は検定に合格している。だが、検定に合格して終わりというわけではなく、日々技の研鑽も怠らない。技能グランプリへの出場もその表れだ。技能士の存在が会社に及ぼすメリットについて、「グランプリで優秀な成績を修めた職人は、自分の仕事にこだわりを持つようになる。そういう人に責任ある仕事を任せられるようになったのが、会社にとって良かったと思いますね。」と、近藤氏は語る。現場の職人の腕が良いと、客と現場との間で仕様の変更なども行うことができ、ことがあるごとにオフィスを通して対応するという手間が省け、業務効率も高まっていったという。

「施主の目の前で仕事が進められていきます。自分の腕にプライドがある職人が自分の家を建ててくれている、その働きぶりを見ることで、施主の満足度も高まり、仕事の印象もいいです。それがまた、次のお客さんの紹介につながっていつているのだと思います。」

自分の腕に誇りを持てるためのサポート

ある時、会社の経営をしている施主が、近藤工務店の職人の業務を見て、「お宅はどうやって人を育てているんだ。」と驚いたことがあったという。また、一日の業務が終わってから、職人が現場の後片付けをきちんとこなすので、ある時などは、施主が「今日は本当に現場で作業したのか？」とオフィスに電話をかけてきたこともあるという。そういった自分の仕事へのこだわりは同社で仕事をする中で培われていく。「自分の腕に誇りを持ってもらう。検定受検や競技会出場のための支援は極力行うようにしています。」この近藤工務店の技へのこだわりが、厳しい環境下でも業績を押し上げる力の源泉になっている。



近藤社長

有限会社 近藤工務店

- | | |
|-----------------------------------|-----------|
| ➤業種: 総合工事業(住宅建築、リフォーム、他建築工事、設計施工) | ➤設立: 平成元年 |
| ➤住所: 新潟県西蒲原郡 | ➤従業員: 10名 |
| ➤代表者: 近藤 進 | ➤技能士: 9名 |

技能士へのインタビュー

小倉 寿浩氏（31 歳） 1 級建築大工技能士



現場経験→訓練校→再び現場へ

近藤工務店の技能士としてインタビューに答えていたのは、小倉寿浩氏。1 級建築大工技能士であり、技能グランプリにも出場経験がある。

小倉氏は、高校卒業後、小倉氏の父が以前一緒に仕事をしていたという縁で近藤工務店に入社。同社に 1 年間働いて現場について身を以て学んだ後に、夜間訓練校に 2 年間通って技術の習得に励んだ。そして現在に至る。

現在は基本的に現場で図面作成から完成まで、家が建つ全てのプロセスに関わっている。「家を建てるというときに、仕事の全ては大工でなされていると思われがちですが、実際の現場には左官や水道や建具専門の設備業者など、様々な人が出入りします。そういった人たちとコミュニケーションを取りながら、情報共有していきます。また、施主とも話をしないといけないんです。営業だってしますよ。意外に思われるかもしれませんが「人と話す」ということが重要な仕事です。でも、そういった外部の人と話すことで、1 人では気付かなかったことを指摘してもらえるので、メリットもあります。」

オールマイティさが求められる大工という存在

建築大工の仕事は、現場での対応の仕方、対応のレパートリーの広さが腕の見せ所と小倉氏は話す。そのため腕や考え方に高い汎用性が必要だ。

「大工はオールマイティである必要があると思います。ありとあらゆる職業のエッセンスが凝縮されているのが大工という仕事。木を触ってるだけじゃない。板金のことも、内装の技術も、水回りの技術だって求められることがあります。」

いろいろな場面に対応できる腕を磨き、使う場である現場の仕事は決して楽ではない。しかし、自分で何でも作ることができるのがこの仕事の魅力でもある。「家の図面を引いてるときなんかは、すごく楽しいですよ。」



洗練されたセンスと技能が組み合わせられて良い建物が作られる。

現場では培えなくなったキホンの習得

小倉氏は、当初、技能検定合格をそれほど意識していなかったと言う。「普通に仕事して、給料もらってやっていけばいいかな、と思ってましたね。でも、社長が色々面倒を見てくれる、ということで勉強してみようかな、と。」そして始めた勉強もはじめは「何でこんなこと勉強しなければならないんだろう。」と頭に疑問符が浮かぶ状態だった。しかし今では勉強しておいて良かったと小倉氏は強く感じている。「技能検定受検のために勉強をした経験があるかないかで現場での仕事に大きな差がつかます。」その差は簡単な仕事ではなかなか表面化してこないが、とっさの施主の要望への対応時や、困難な作業をする時に表れてくる。そういった時に、検定受検のために吸収した知識がものを言う。「手で素材を計測したり加工したり、検定で問われる「正確に作る」ということを経験しないといけないんです。今の現場では機械を使うのが当たり前になってしまっているけれど、そこに基本は無いんです。省かれてしまったその部分は、自分で身に付けられないといけない部分だと思っています。」

昔の方法を学び、仕事の中心に据える

今後は自分が身に付けた技術を後輩に伝えたいと話す小倉氏。教え・教わる関係は、個別性が高いが、小倉氏は「褒めて伸ばす」タイプと自分を分析する。怒られて萎縮してしまうより、のびのびやってもらいたいという考えが背景にはあるようだ。

「最終的には、親方に自分のアイディアを伝えられるようになれば一人前ですね。いくらいいい年でも、ヒトの下でやっていたらいつまで経っても若手扱いです。いつかは自分から抜け出していかなければならない。その前段として、日常の作業でいい仕事ができるようになっていなければならない。自分のオリジナリティが出せるのは、普段の仕事でいい仕事ができるようになってから。」と技能士の「一人前像」について小倉氏は語る。

結局、自分にしかできないことを追求していこうとすれば、先輩や親方の技の中に組み込まれた基本の技術に立ち返らなければならない。基本となる方法を学んでその技術を自分の仕事の中心に据える。小倉氏の基本を重視する仕事への向き合い方は、全ての技術者が良い仕事をするための示唆に富んでいた。